

令和6年度 自己評価表							
中長期目標		○学びを生かし、社会とつながりを持ちながら、自分の夢や目標に向かい行動する生徒の育成。 ○学びを自信にかえ、多様さや変化に富む社会を生きる力の育成。					
		今年度の重点目標	1 生徒一人ひとりの「わかった」「できた」を大切にした学びの積み上げ 2 生徒誰もが安心して学ぶことができる環境づくり 3 学び直しを希望する人とつながる（ニーズの掘り起こし）				
年度当初				評価結果（2）月			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標 （年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 生徒一人ひとりの「わかった」「できた」を大切に にした学びの 積み上げ	多様な資源を活用し 付けたい力を伸ばす きめ細やかな指導	・学習面談等をとおして各々の学習経験や学力実態、学習目標に応じた指導を行っているが、より一層学習の理解度や積み上げに応じた対応が必要な生徒もいる。 ・ゲストティーチャー等の活用はできている。 ・学習ボランティア（鳥大生）の受入れを計画している。	・生徒アンケート「授業満足度」の肯定的評価80％ ・生徒各々の今年度1年間の重点目標が概ね達成されている。	・学習面談の定期的な実施（年5回）と教職員間の情報共有を図り、「個別の学習計画」に基づいた授業を実施する。 ・ゲストティーチャーや学習ボランティア（鳥大生）、近隣他校との連携を推進することで、生徒の学びをさらに深める。 ・学んだことを実生活に役立てる学習を工夫する。 ・学んだことを関連付ける教科横断的な授業の工夫で、より深い理解を促す。	・生徒アンケート「授業満足度（だいたいを含む）」は94.6%（10月85.0%）、「授業満足度（強い肯定）」67.8%（10月45.2%）と上がっている。これは学習面談等の結果を教科担当者と情報共有し、生徒の実態やニーズに合った授業を進めることができたことの結果であるともいえる。 ・ゲストティーチャーや校外での学習では、事前に生徒への紹介や事前学習を行った上で授業に臨むようにした。	B	・学習面談等の結果を個別の学習計画に追記した上で、教科担当者との情報共有を図り、個々の目標達成につなげる。 ・鳥大生ボランティアとの交流の機会を増やすとともに、学習支援の参加の方法を検討する。 ・実生活に役立つ学びや教科横断的な学びができるように学習計画の見直しや授業の工夫に努める。
	学び方を知り、わかった・できたを実感できる授業の工夫	・ICT等を活用し、視覚化や構造化された授業を進めている。概ね基本的事項の定着を目指しているが、いかにして生徒の学力の定着を見取るかが課題である。 ・生徒の既習状況は予想以上に多様であり、現在の教育課程（時間割等）をより生徒の実態にあったものにしていく必要がある。	・生徒が自分に合った学び方を選択し、主体的に学習を進めることができる。 ・生徒アンケート「ICTやワークシートなど、いくつかの選択肢があり、自分に合った学び方を選ぶことができる」の肯定的評価80％ ・生徒アンケート「授業はわかりやすい」の肯定的評価80％	・ICT（デジタル教科書、Google Classroom、動画等）やワークシートなど、複数の学習方法を示し、生徒が自分に合ったを学び方を選ぶようにする。 ・意見発表などを取り入れた対話的な学習を進める。 ・新しい学びや気づきのある学習課題を意識した授業を行う。 ・毎時間の授業の振り返りとその記録に努める。 ・次年度実施教育課程の検討と改善を行う。	・生徒アンケート「ICTやワークシートなど、いくつかの選択肢があり、自分にあった学び方を選ぶことができる」は85.7%、「授業はわかりやすい」は87.5%の肯定的評価が得られた。 ・授業のわかりやすさ、ICTの活用による理解、自分の考えをまとめ表現する機会が多いなど生徒の評価が高く、教員の授業改善に向けた工夫とともに、生徒自身の学ぶ力が向上してきたと考える。	B	・引き続き、授業改善に向けた工夫を続けるとともに、職員室が教員の学びの場となるよう教員同士の情報交換を密に行う（若手育成プロジェクト：「わかめん会」と呼称）。 ・意見発表や対話的な学習の方法をさらに取り入れ、授業での生徒同士の「つながる」を目指す。 ・ICTの活用方法について、他教科の授業を参観し、自分の教科で取り入れられることを実践する。
2 生徒誰もが安心して学ぶことができる環境づくり	自己や他者を理解	・自分のトリセツ（自己紹介や周りの人に理解してもらいたいこと等）や協働学習等を通して、自己や他者の理解を深める場面づくりをしているが、欠席する生徒も多く思うように進んでいない。出席している生徒同士は徐々に理解が深まっている。	・自分のトリセツや協働学習を通して、生徒同士が適切な距離感で自己の得意・不得意を伝えたり、仲間の得意・不得意を理解したりすることができる。 ・互いに声を掛け合いながら、安心して学校生活を送ることができる。 ・生徒アンケート「学校では安心して学んだり生活したりすることができる」の肯定的評価80％	・自分の取説や各授業で行われる意見交換、協働学習を通して、相互理解を深める場面づくりを行う。 ・教育相談、学習面談等を通して、自己を見つめる場面を作る。	・これまで欠席が多かった生徒が登校してくるようになり、授業中の意見交換や休憩時間の会話等で、互いに刺激を受けることが増え、仲間のよさを認めたり、知ったりする機会を増やすことができた。 ・授業中、学習のルールを意識するようになった。 ・教育相談、学習面談以外でも相談に乗り、自己理解、他者理解に繋がった。 ・生徒アンケート「学校では安心して学んだり生活したりすることができる」の肯定的評価87.5%（10月83.4%）と上がっている。	A	・今後も教育相談や学習面談だけでなく、教育活動の中で場面を捉えて、自己を見つめたり、他者を理解したりする機会をつくる。 ・道徳の授業や専門家を招いた授業をとおして、自分の思いの中だけで物事を考えるのではなく、幅広い見方・考え方に触れ、客観的に物事を捉えることの大切さに気づかせるようにする。 ・必要に応じて福祉や就労等の外部専門機関と連携する。
	意欲と自信の向上	・様々な理由で登校ができていない生徒がいる。 ・授業への新鮮さから意欲的に取り組む姿が見られる。 ・不登校等が原因のため、「自分ではできていない」という思いを持った生徒が多く、自己肯定感を高めるための支援が必要である。	・生徒が自分に合った学び方を選択し、主体的に学習を進めることができる（再掲）。 ・生徒アンケート「学習を積み重ね、自信がついてきている」の肯定的評価80％	・「わかった」「できた」を実感し、賞賛や励ましの言葉を伝える場面のある授業づくりを行う。 ・T2、T3による学習支援の充実を図る。	・学習面談等で生徒とこれまでの振り返りと今後の目標について確認した。場面を捉えて、確認した内容を生徒に声掛けし、励ましながら学習意欲につなげた。 ・個別の学習計画をもとに、生徒が達成感や充実感を得られるように、教員が意識してスモールステップでの授業づくりを行った。 ・生徒アンケート「学習を積み重ね、自信がついてきている」の肯定的評価85.7%（10月42.9%）と上がっている。	B	・授業づくりにおいて、T1とT2、T3の連携を密にし、必要に応じて、より個に応じた学習支援ができるようにする。 ・生徒は「わかった」「できた」を実感する場面が増えてきているが、それが本当に身についたかどうかについては不安を抱えているので、わかったことやできたことを確かめられるような学習活動を組み、生徒が学習したことで、確かな自信を持てるようになる授業づくりを行う。
	対人コミュニケーションの活性化	・自分のトリセツ、協働学習等をきっかけに相手に関わりをもとうとする生徒もみられるが、欠席のためその機会を逃してしまい、まだ関わりが持てていない生徒もみられる。	・授業の中での教え合いや協働学習を通して、仲間との関わりを持ちコミュニケーションをとることができる。 ・生徒アンケート「仲間とつながりを持ち、力を合わせて活動している」の肯定的評価80％	・教職員対象の研修会、生徒対象の講演会等を行い、日常生活でのコミュニケーション力向上につなげる。 ・生徒会活動（校内美化活動等）を通して、生徒同士が関わりやすい環境づくりを計画する。	・文化祭で生徒一人一人に発表の場を作り、一人でじっくりと考えた時間を確保した。その後、生徒が協力する場面を作るために、互いにアドバイスをする時間と練り上げる時間を計画的に繰り返した。（※各教科でも意図的に行った。） ・生徒アンケート「仲間とつながりを持ち、力を合わせて活動している」の肯定的評価100%（10月50%）と上がっている。	A	・普段の学習の成果の発表の場として、今後も一人でじっくりと考えた後、みんなで協力して課題に取り組む時間を取るように計画していく。 ・生徒へのかかわりについて、教職員間の情報共有を密にし、生徒への関わり方のバリエーションを増やしていく。
3 学び直しを希望する人となつながら （ニーズの掘り起こし）	開かれた教育活動の展開	・まな森文化祭等、校内のイベントへの外部の方の参加を企画している。 ・学習ボランティア（鳥大生）の受入れを計画している（再掲）。	・地域住民との交流が始まり、地域に開かれた学校となりはじめる。 ・鳥取大学、県立高等学校等、主に近隣の学校との連携が進む。	・地域住民が参加できるイベント（文化祭等）の開催や近隣学校同士の連携、協働を促進する機会を設ける。 ・ホームページやSNSなど、学習成果の発表の場を増やす。 ・地域イベント等での学習の成果物等を展示する機会を設ける。 ・学習成果をまとめた動画を作成・配信する。	・文化祭の作品展示を県庁及び県立図書館で開催し、併せてまなびの森学園を紹介する動画を流して情報発信に努めた。 ・学校見学や学校説明はいつでも可能として対応しており、他の中学校の教職員から複数回来校していただいた。	A	・学校生活における日常の様子を短時間動画をつくって発信していく。 ・学校見学や学校説明会については、地域住民の方々との交流機会を捉えて実施するなど、より開かれた形を模索していく。
	効果的な広報の工夫	・ホームページ、SNSにより、教育活動を随時情報発信している。 ・体験授業会等の機会を捉え、チラシ等の配布を計画している。 ・メディアへ情報提供をしている。 ・体験授業会、学校説明会の開催を企画している。	・まなびの森学園の存在が県民に広く知られ、学び直しを希望する人が相談できる環境となる。 ・本校のコンセプトを理解した入学希望者が増加する。	・ターゲット層に合わせたバリアフリーな広報を行う（学び直しを希望する人に合わせ、やさしい日本語や多言語での情報発信等）。 ・ホームページ、SNS、チラシ配布等の紙媒体に加え、地域メディア（新聞、ラジオ、テレビ等）など、広報手段を多様化する。 ・広報効果の測定・分析（ホームページのアクセス数、SNSのフォロワー数等）を行い、分析結果に基づいて、広報戦略を改善していく。	・鳥取大学学生のボランティアや近隣の学校との連携が進みつつある。 ・SNSで令和7年度入学者の再度募集を動画入りで配信したところ、閲覧数が5300を超え、いつも以上に情報発信ができた。 ・方策どおり多様な手段を活用して広報を行っているが、本校の認知度や学び直しを希望する人の増加には至っていない。	B	・体験授業会以外の日でも随時、授業体験の受け入れができるようにする。 ・鳥大学生ボランティアの方にもっと学校のことを知っていただいた上で、広報に協力してもらおう。 ・本校が実施する様々なイベント等で事後アンケートを行い、どのようにイベント等を知ったかを尋ね、有効な周知方法について検討する。 ・外部へのチラシや配布文書等には、HPや動画等のQRコードを貼付する。
4 ワーク・ライフ・バランスの推進	自己研鑽とワーク・ライフ・バランスの実践	・教育センターの資源を活用するなど、生徒実態に応じた教材づくりに努めようとしている。 ・教職員は時間外業務削減を意識している。	・家庭・地域生活での活動や、自己目標に応じた自己研鑽の機会が確保できている。 ・全教職員が時間外業務月45時間、年間360時間を超えない。	・研修機会の情報収集・発信を行い、参加しやすい風土をつくる。 ・関係機関や地域等の資源・力を有効活用する。 ・年次有給休暇の取得を促進し、個々の仕事と生活のマネジメントを習慣化する。	・複数名で研修参加できるようにしたり、管理職から個に応じた研修の受講奨励をしたりした。 ・授業はT T体制が基本で、担当教科以外の授業を見合うことが習慣化し、授業改善への意識付けとなっている。 ・「自己研鑽やワーク・ライフ・バランスを実現させている」の肯定的評価は90.0%。	A	・キャリアアップを意識した校外研修や県外夜間中学の教職員との交流など、研鑽の場を広げる。 ・管理職、衛生委員会委員が率先行動したり、働きかけたりして、セルフマネジメントを促進する。
	業務能率向上とチーム学校の活性化	・開校初年度で業務の見通しが立たないものがあり、教職員間で情報共有を図りつつ、試行錯誤しながら業務計画を立て進めている。 ・学校運営上役立つ情報などを随時、整備し、教職員間で共有していく必要がある。 ・開校初年度の各教科ごとの授業を想定した教材を整備し、保有教材を見える化し活用している。	・業務に関する必要なものや情報等の共有化が図られ、業務に取り組みやすい環境が整っている。 ・次年度への業務引継や改善点が明確になっている。 ・ICTの活用による業務削減、効率化が図られている。	・報・連・相を昼礼・夕礼・終礼のスモールステップで行い、協議事項をためず対応を円滑にする。 ・物品や簿冊等の設置・保管場所の指定及び、校内情報共有DBの活用と記録による業務の可視化と共有化を図る。 ・事務作業のフロー図提示や、要不要を見極め簡略化を図る。 ・気付いた業務改善点を共有し、次年度以降の計画的な業務進行に反映させる。 ・学校行事の検討、精選等により、運営の簡素化・省力化を進める。	・ICT活用や、簿冊・物品を最小限に整理整頓するなどして、業務の可視化・効率化に努めた。 ・事務作業のフロー図を作成し、わかりやすい手順で業務を進めることができた。 ・主要事業や学校行事等、振り返り会議やアンケートを行い改善点を引き継ぐようにした。また、日々の業務課題については優先度等に応じ即座に改善を行った。 ・若手教員チーム主体の企画を柱として、若手、ベテラン双方の人材育成とチーム力向上を試みている。	B	・引き続き校務DXを推進するとともに、業務を精査したり簡略化したりする。 ・担当が変わっても持続可能となるような業務引継のルール化・習慣化を図る。 ・学校運営に係る企画提案を誰もが行うチャンスを作り、主体性をもち業務に取り組む風土を醸成する。 ・チーム体制での業務進捗管理、業務の協働・平準化を図る（属人化防止）。